母子分離に不安を感じるＡ君への関わりについて

社会福祉法人嬉泉　子どもの生活研究所めばえ学園
齋藤　崇

（不安に寄り添う　積極的に関わる　話し合う）

１．はじめに

めばえ学園は言葉や人間関係の発達に課題を抱える児童のための幼児通園施設で、自閉症スペクトラム等の診断を受けていたり、保育園や幼稚園との併行通園を行っていたりする児童もいます。

２．事例概要

Ａ君は今年度４月に入園した３歳児で、入園まで母子分離の経験はありませんでした。発声はありますが単語は「ママ」のみで、簡単な言葉の理解はあります。身辺自立は排泄以外の着脱等はほぼ自立しています。玩具での遊びよりは、車やアニメ等の本を眺めていることが多いです。

今回、入園時母子分離に不安を感じていたＡ君が、療育者との関係を深めることで母親とも離れて部屋で過ごすことが出来るようになった経過を報告します。

３．支援内容

≪入園当初の様子と心掛けたこと≫

・Ａ君は入室の際、母親にしがみつき離れまいと必死な様子でした。そこで母親と一緒に入室しましたが、他のお友達が近づくと母親をつねったり、噛んだりと戸惑いや不安を見せていました。持参のリュックと水筒は肌身離さず持ち、常に母親の体に触れて過ごしていました。そこで、まずＡ君が安心できるように母親には同席してもらい、対応する職員も固定しました。Ａ君にとって心地よい環境づくりと同時に、そこに人の存在が「嫌なことをされない、脅かされない、自分にとって良いもの」と感じられるような働きかけを心がけ、療育者との信頼関係を構築することを目指しました。例えば、他児が近づいた時には療育者が「びっくりだね。大丈夫だよ」「本見せてねだって」等、気持ちの代弁を行い、また好きな絵カードで楽しい雰囲気づくりや、Ａ君が視線を向けてきた時にはこちらの好意が伝わるような声かけをし、Ａ君の防衛的な態度が和らぎ、療育者の存在を無理なく受け入れてもらえるようにと考えました。

・母親は、Ａ君に早く集団生活に慣れてほしいという不安や焦りも感じている様子でした。Ａ君が新しい環境の中で精一杯自分を表現し頑張っていること、療育者が母親のように安心出来、「療育者と一緒で大丈夫」と思えるよう関わりを重ねることが今は大事であり、そのことでＡ君自身も成長していくことを伝え、分離は段階を踏み進めていくことを理解してもらいました。

≪Ａ君の変化と分離時の対応≫

・Ａ君は少しずつ母親から離れて療育者と部屋を散歩したり、玩具がうまくいかないと手を引いたり、本を一緒に見るなど過ごすようにもなりました。そこでＡ君が遊び始めた時にお別れの挨拶をして母親に退出してもらいました。Ａ君は一瞬泣くものの、療育者に抱っこされ慰められると徐々に泣き止み、また自分で遊び始めました。遊んでいて母親を思い出し入口のドアの前に座ることもありましたが、「ママ」と言うＡ君に、「ママ来るよ」「待っててえらいね」とＡ君の不安や淋しい気持

ちに共感しながら療育者が応えると、じっと療育者を見てからまた本や遊んでいる他児の様子を見たり、療育者と遊び始めていました。A君なりに療育者を頼りに、今の状況を受け入れていこうとしていることを感じました。

その後のA君は、部屋の入り口で先生に抱っこされて入室し、次からは「えーん」と声をあげながらも、自分から荷持を持ち入室するようになりました。現在では母親にぎゅっと抱きつきから笑顔で入室しています。お守りのように持っていたリュックはいつしか手放し、他児と一緒に保育室だけでなく、体育館や園庭等、場所を移動しながら、A君なりに楽しめる遊びも増えています。療育者とのスキンシップを喜び、働きかけにも応じられることが増えてきました。母親もそんなA君の頑張りや変化を、日々療育者と話しながら感じている様子です。

４．まとめ

私達はまずはA君に共感的・受容的に関わっていき、その言動の背景にあるものは何か等を考えて、A君が安心感を持てるような対応をし、その上でこちらから積極的な関わりをもつようにしました。幼児期に基盤となる基本的な人間関係を育てることは重要なことです。母子関係から出発し、安心、信頼できる大人との相互交流の中での人間関係の広がりがお子さん自身を成長させていきます。今回療育者間でも日々のA君の状態を共有しながら、話し合いを繰り返して対応できたことは私にとって良かったことです。そして、母親とも一緒にA君を見守り協力体制をとれたことは大きなことでした。母親がA君を理解し前向きな気持ちで見守り続けたことも、A君に安心感を与え変化をもたらしたと思います。その為にも母親への細やかな支援の必要性も感じさせられました。分離不安を持つ児は毎年入園してくるため、１つ１つの事例を振り返りながら、今後も研鑽に励んでいきたいと思います。

＜助言者コメント＞　　森田　規子（世田谷区教育委員会事務局教育相談専門指導員）

感染症下で入園や入学を迎えた保護者と子どもたちは、これまでとは違う不安を抱えていたと思います。特に３歳児が初めて母と離れて小集団に参加するということは、親子にとっても大きな冒険でしょう。また、同時に発表者の先生方は小さい子どもを身体ごと受け止める覚悟や気遣いなどで、入念な準備へのご苦労も特別だったと思います。発表内容からは、そのような厳しい状況にも拘らず、子どもが園生活を楽しめるのだろうかという保護者の焦りや不安をきちんと支えて、A 君の気持ちに寄り添いながら落ち着いて互いの距離を縮めていったご努力がよくわかります。初めは緊張や不安が高かったA 君が先生の声かけで楽しそうな活動に興味をそそられて、思わずお母さんと離れた時。また、そろそろお母さんが迎えに来てくれる頃だと気づいた時の様子や、お母さんと再会して笑顔で抱きついていく様子には「僕、やったよ」という自信が徐々に育ってきていると感じます。

保護者と先生方の足並みの揃った温かいかかわりが、A 君の成長発達をこれからも支えていくことを期待しています。